



TITLE:

戦國の會盟と符 : 馬王堆漢墓帛書『
戦國縱横家書』二〇章をめぐって

AUTHOR(S):

工藤, 元男

CITATION:

工藤, 元男. 戦國の會盟と符 : 馬王堆漢墓帛書『戦國縱横家書』二〇章をめぐって. 東洋史研究 1994, 53(1): 1-23

ISSUE DATE:

1994-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154479>

RIGHT:

東洋史研究

第五十三卷 第一號 平成六年六月發行

戰國の會盟と符

——馬王堆漢墓帛書『戰國縱橫家書』二〇章をめぐって——

工藤元男

はじめに

第一章 戰國時代における會盟の事例

第二章 馬王堆漢墓帛書『戰國縱橫家書』二〇章の史料的性格

第三章 會盟と符

第四章 符の形態をめぐって

むすび

はじめに

1
春秋時代を象徴する政治現象である會盟は、戰國時代になると餘韻を残しながらも次第にその姿を消してゆくとされている。たしかに春秋時代は周王の權威が弱體化し、覇者がその權威を代行し、しばしば會盟の形式を通じて諸國の統制が

行われた。しかしそうした王權の弱體化とそれに伴う諸國間の對立と抗争は、必ずしも春秋時代だけの狀況ではなく、戰國時代も同様だったはずである。それ故會盟は戰國時代でも行われ、じじつ『戰國策』や『史記』にはそれに關する記事がしばしば見える。しかし從來この時期の會盟については研究者の關心が薄く、例えば本田濟氏もそれが「強國秦に對しての現實的な攻守同盟」⁽¹⁾であつたと簡單に述べているにすぎない。しかし氏の指摘は戰國の會盟がこの時代を象徵する「合縱連衡」と深く關わつていたことを逆に示唆するものではあるまいか。合縱連衡と會盟との關係についてはさらに近年長沙市で發見された馬王堆漢墓帛書『戰國縱橫家書』の中にも新たな史料が見出される。そこで小論はこの出土文字資料を主な手がかりとして、戰國時代の會盟のもつ歴史的意味について考察してみたいと思う。

第一章 戰國時代における會盟の事例

そこでまず先學の研究に依據して春秋時代の會盟を概觀し、その上でそれと戰國時代の事例を比較してみたいと思う。

陳顧遠氏は會盟を朝覲・聘問・報拜・告請・弔恤等の氏の所謂「常時之邦交」と區別し、これを「臨時之策略」と稱しているが、⁽²⁾しかしそれが前者に劣らぬほど盛んに行われていたことは、清の姚彥渠撰『春秋會要』卷之四賓禮・會盟遇の條を見れば一目瞭然である。闕勳吾氏によれば、⁽³⁾『春秋經』の記載内容の八割が諸侯國間の外交に關するもので、その中の二割が朝聘、二割が會盟に關するものという。その會盟の定義的説明について『禮記』曲禮下に「諸侯未だ期に及ばず相見ゆるを遇と曰い、卻地に相見ゆるを會と曰い、諸侯、大夫をして諸侯を問わしむるを聘と曰い、約信するを誓と曰い、牲に泣^{のそ}むるを盟と曰う」とあり、諸侯が約束の期日ではなく、たまたま他の諸侯に出くわして會するのを「遇」といい、約束して卻地で會するのを「會」といい、諸侯が大夫を派遣して他の諸侯を見舞うのを「聘」といい、諸侯が互いに口約束をするのを「誓」といい、犧牲を用い坎^かに臨んで約束するのを「盟」という、とする。じっさいの事例では會と盟はしばしば相伴って行われ、また會盟と熟して見えることも多いが、會・盟の各字はその一字だけでも兩方を意味する場

合がある。⁽⁴⁾ 高木智見氏は、この會盟の具體的儀禮内容を次のように整理しておられる。まず事前にその集合の期日と場所が相手國に通告される。その場所として多く山川丘陵の地が選ばれ、會場には幕が張られ、壇が築かれ、木を立てて参加者の位置が示される。參會者の間で討議され合意されたことは載書として記録される。そこで大地に坎を掘り、犠牲の牛を殺し、主盟者がその耳を切り落としてそれを盤に載せ、順次その血を⁽⁵⁾ 飲^すって載書が宣讀され、參盟者も歃血してこれを讀む。その後載書を坎の中に納め、しばしば覺禮として羊を一緒に埋める。こうして載書は坎の中に埋められると共に、盟府にも保管され、各參盟者もこれを持ち歸って保管する。このような結盟儀禮は、高木氏によると殷周時代の社會組織が變化し、それまでの血縁秩序が時代を律し切れなくなったため、親族⁽⁶⁾ 兄弟關係を指定することによってあらゆる關係の強化を圖ろうとしたためであるという。

ところがこのような會盟の事例は戰國時代にも少なからず見られるのである。例えば『史記』卷五秦本紀に、「(孝公)十九年、天子、伯を致す。二十年、諸侯畢く賀す。秦、公子少官をして師を率い、諸侯を逢澤に會して、天子に朝せしむ」とあり、戰國中期の重要な政治事件である⁽⁷⁾ 逢澤の會⁽⁸⁾ のことが見える。ただし『戰國策』秦策四の或爲六國說秦王には「魏、邯鄲を伐つ。因って退きて逢澤の遇を爲し、夏車に乗じて夏王と稱し、天子に朝爲⁽⁹⁾ (爲は衍字) して、天下皆な從う」とあり、主盟國の名が秦本紀と異なっており、楊寬氏はこの主盟者を魏の惠王としておられる。⁽⁶⁾ ともあれここで注意すべきことは、秦本紀が「逢澤に會す」に作り、秦策が「逢澤の遇を爲す」に作り、その高誘注に「遇は、會なり」とあるように、戰國時代では遇・會が互用され、曲禮下にあるような遇と會の區別がなかったらしいことである。また同篇に「郤地に相見ゆるを會と曰う」とある⁽¹⁰⁾ 郤地⁽¹¹⁾ に對して、鄭玄は「閒なり」と注し、清の孫希旦はこれを「境上の地なり」と解するように(國學基本叢書所收の『禮記集解』、⁽¹²⁾ 郤地⁽¹³⁾ とは⁽¹⁴⁾ 國境の地⁽¹⁵⁾ の謂である。そして『戰國策』には「遇於境」という表現がしばしば見られ、例えば秦策四の楚使者景鯉在秦に「楚の使者景鯉、秦に在り。秦王に従いて魏王と境に遇う」とあり、魏策四の樓梧約秦魏に「樓梧(姚本一作「部」)、秦・魏を約し、將に秦王をして境に遇わしめんと

す」とあり、韓策二の楚圍雍氏韓令冷向に「甘茂、昭獻と境に遇う⁽⁷⁾」とあり、以上の諸例から戰國時代の會盟は「……に會す」「……に遇す」等と表現されて、卻地で行われたことが知られる。

また、盟については、『戰國策』魏策一の張儀爲秦連衡說魏王に、張儀が秦のために連衡策を立て、「合縱する者は天下を一にし、約して兄弟と爲り、白馬を刑^さして以て洄水の上に盟し、以て相堅くするなり」と魏王に述べたとあるように、『史記』卷七〇張儀列傳もほぼ同文、戰國時代でも盟には犠牲が伴い、所謂擬制的な親族⁽⁸⁾兄弟關係の措置が求められていたことが確認される。ただ犠牲が牛ではなく馬の例が多いのは、戰國時代の特徴であろうか。

さらにまた『春秋公羊傳』隱公一一年の條に「其れ朝と言うは何ぞや。諸侯の來るを朝と曰い、大夫の來るを聘と曰う」とあり、諸侯國間で諸侯自ら使者として相手國に赴くことを朝と言ひ、大夫が赴くことを聘と言ひ、とする。戰國時代の聘の用例はあまり史料に見えないが、朝の用例はいくつか見える。そこで戰國時代における朝・會・遇の例がどれほど確認できるかを通覽してみよう。ただし『戰國策』と『史記』は同一内容でも文に異同が多く、また戰國故事と紀年の間に問題が多いので、とりあえず『史記』卷二八六國年表に基づき、それを本紀や世家により補う形で戰國時代の會盟に關する年表を作成してみると、表一のようになる。これより戰國諸國の朝・會・遇・盟の事例は、一般に想像されるほど少ないわけではなかったことが改めて了解されるのである。

第二章 馬王堆漢墓帛書『戰國縱橫家書』二〇章の史料性格

それではこれらの會盟は、春秋時代のそれと比べてどこにその特色があつたのであろうか。この問題を考える上で、馬王堆漢墓帛書『戰國縱橫家書』二〇章は、我々に重要な知見を提供している。そこでまず簡単に同書（以下、帛書と略稱）の概要を述べておく⁽⁹⁾。

帛書の全體は二七篇からなり、各篇の形式などから大別して一章～一四章、一五章～一九章、二〇章～二七章、の三つ

に區分するのが一般的である。第一類は四、五章の一部が『史記』蘇秦列傳と『戰國策』燕策に見える以外は、みな佚文である。第二類は、佚文は十七章のみで、他はみな『史記』『戰國策』にはば同文が見える。第三類は、二五章〜二七章が佚文で、他は『史記』『戰國策』に共通記事があり、とくに二四章は『韓非子』十過篇に關連する部分を含む。多くの佚文を含むこの資料は、戰國史の史料として必ずしも信頼されなかった『戰國策』と『史記』の戰國部分に對して、信頼性を回復する新たな契機となっている。その帛書二〇章は以下の如くである。⁽¹⁰⁾

●燕王に胃(謂)いて曰く、「列して萬乘に在りながら、質を齊に奇(寄)するは、名卑くして權輕し。萬乘を奉じ齊を助けて宋を伐たば、民勞して實費えん。夫れ宋を以て之に淮北を加うれば、強さ萬乘の國なり。而るに齊、之を兼ねれば、是れ齊を益すなり。九夷は方一百里あり、加うるに魯・衛を以てせば、強さ萬乘の國なり。而るに齊、之を兼ねれば、是れ二の齊を益すなり。夫れ一の齊の強きすら、燕猶お支うる能わず。今、三の齊を以て燕に臨めば、其の過(禍)は必ず大ならん。然りと唯(雖)も、夫れ知(智)者の事を【擧ぐるは】、過(禍)に因りて福と【爲し】、敗を轉じて功を爲すものなり。齊の紫は、敗素なれども、賈(價)十倍す。句淺(賤)は會稽に棲めども、其の後、呉を殘いて、天下に霸たり。此れ皆な過(禍)に因りて福と爲し、敗を轉じて功を爲すものなり。今、王、若し過(禍)に因りて福と爲し、敗を轉じて功を爲さんと欲すれば、則ち招きて齊を霸として之を尊び、周室に明(盟)いて秦の符を焚(焚)き、『大(太)上は秦を破り、其の次は必ず長く之を忘(擯)けん』と曰わしむるに若くは莫し。秦、忘(擯)けらるるに【挾い】以て破るるを待(待)たば、秦王は必ず之を思えん。秦は、五世、諸侯を伐ちながら、今は齊の下と爲る。秦王の心、苟くも齊を窮(窮)しむるを得ば、國、壹を以て棲(接)することを難しとせざらん。然らば則ち王何ぞ辯士をして若き説を以て秦王に説かしめざる。曰く、『燕・趙、宋を破りて齊を肥し、之を尊びて、之が下と爲るは、燕・趙、之を利とするに非ず。燕・趙、利とせずして而も執(勢)い爲す者は、秦王を信ぜざるを以てなり。然らば則ち王は何ぞ信す可き者をして燕・趙を棲(接)收せしめざるや。經(經)陽君の如き、高陵君の如きをして、

燕・趙に先んぜしめ、へ秦に變有らば、因りて以て質と爲さん」と曰わしむれば、則ち燕・趙は秦を信ぜん。秦は西帝と爲り、燕は北帝と爲り、趙は中帝と爲り、三帝を立てて以て天下に令せん。韓・魏、聽かざれば則ち秦伐ち、齊、聽かざれば則ち燕・趙もて伐たば、天下孰か敢て聽かざらん。天下服聽せば、因りて韓・魏を迫（驅）りて以て齊を伐ち、へ必ず宋を反し、楚の淮北を歸せ」と曰え。宋を反し、楚の淮北を歸すは、燕・趙の利する所なり。三王を並立するは、燕・趙の願う所なり。夫れ實は利とする所を得、尊は願う所を得れば、燕・趙の齊を棄つること、沙（驪）を説（脱）ぐがごとくならん。今、燕・趙を收めずんば、齊の伯（霸）必ず成らん。諸侯、齊を贊けて、王從わずんば、是れ國伐たれん。諸侯、齊を伐ちて、王之に従わば、是れ名卑からん。今、燕・趙を收むれば、國安くして名尊く、燕・趙を收めずんば、國危うくして名卑からん。夫れ尊・安を去りて卑・危を取るは、知（智）者は爲さざるなり」と。秦王、若き説を聞かば、必ず心を諫（刺）さるる如くならん。然らば則ち「王、何ぞ辯士をして、如き説を以て秦に【説か】しめざる。秦は必ず取り、齊は必ず伐たれん。夫れ秦を取るは、上交なり。齊を伐つは、正利なり。上交を尊び、正利を務むるは、聖王の事なり」と。

『戰國策』燕策一の齊伐宋宋急と『史記』卷六九蘇秦列傳にもこれと同文が見られるが、三者の間に字句の異同があり、その最大の相違點は燕策と蘇秦列傳の冒頭に「齊伐宋、宋急。蘇代乃遣燕昭王書曰」の一四字、末尾に「燕昭王善其書曰……乃召蘇氏（代）復善待之、與謀伐齊、竟破齊、閔（湣）王出走」（括弧内は蘇秦列傳の用字、以下同じ）の五三字があることである。帛書は『史記』・『戰國策』に先行する前漢文帝一二年以前に書寫された書籍であるから、兩書では本來原文にはないこれらの部分を挿入し、これを齊が宋を攻めてきたとき蘇代が燕の昭王に宛てた書簡とし、その進言を受け入れた昭王が再び蘇代を召して齊を伐ち、破れた齊の閔（湣）王が出走した、というプロットに仕立てていることがわかる。⁽¹¹⁾しかしこの挿入はあくまで兩書の解釋に基づくもので、それらの原文にあたる書簡の中では、當事者は單に燕王・齊（王）等と呼ばれているにすぎない。書簡であれば同時代の君主が諡號で呼ばれるはずはなく、それ故この資料が原型により近

い形の書簡であると想定し得る論據の一つとなっている。また藤田勝久氏は帛書第一類の史料性格について、その中に創作故事につきものの教訓的言辭が見られぬこと、その内容が遊説の論點よりも戰國中期の現實の情勢が取り上げられている點を指摘し、その現れとして文中に「今……」という語がしばしば見えることに注目されているが、それはこの書簡についていえるのである。ちなみに帛書における書簡および進言者の奏言形式の文の冒頭の句と、その文中の「今……」の回數を一覽表してみると、表二のようになる。これらのことから、帛書二〇章は本來書簡だったものが、後に『史記』『戰國策』の中に戰國故事の一篇として編入されたものと見なされる。

そこで次にこの書簡の背景を探ってみたい。するとこの時期は、秦と齊とが東西に對峙し、その間に挟まれた諸國はそのいずれかの傘下に入ることを餘儀なくされ、所謂「合縱・連衡」が複雑に展開された戰國中期にあたる。そのころ秦は岸門の戦いをへて韓魏を服屬させると、主力を楚に向け、楚を齊との同盟から切り離し、漢中郡を占領してそれを巴蜀と繋げ、秦本土に對する楚の脅威を取り除いた。ところが齊に湣王が即位すると、齊は韓魏と結んで盟約に背いた楚に進攻し、楚軍を大敗させると、矛先を秦にむけ、函谷關まで攻め入った。秦は講和を餘儀なくされ、山東諸國の合縱に脅威を感じ、そのため遠交近攻策により齊と修好して合縱を解除させようと圖った。一方、齊は宋および楚の淮北の地を狙っていたので、その修好に喜んで應じ、かくて秦と齊はそれぞれの思惑を抱きながら連合することになった。秦はこれ以後、韓魏に對して大規模な攻勢をかけ、秦將白起の度重なる攻撃で韓魏は敗北を重ね、次々と領土を蠶食され、そのため魏は趙に接近する。ところがたまたま宋で内亂が起こり、齊はこれに乗じて宋を滅ぼそうとし、趙も魏と連合して宋を攻めようとし、秦も穰侯魏冉がその封地として宋の定陶を狙った。⁽¹³⁾以上のような概觀をふまえて帛書の内容を要約すると、次のようになるだろう。

齊が宋を攻め宋が急迫したとき、ある人が燕王に對し書簡で次のように進言した。いま燕は質子を齊に委ねて名折れに甘んじているが、さらに宋を伐つのに參加すれば吏民共々疲弊するであらうし、齊が宋の地を兼併しさらに楚の淮北の地

まで占領するようになれば、今後燕は三倍の齊を相手にしなければならなくなる。そのような局面を開くには、まず齊を周の宮廷に招いてこれを覇者に推戴し、齊を盟主とする新たな同盟を結び、秦と交わした符をすべて焼くことである。そうなれば秦は必ず齊と戦わざるを得なくなろう。その上で燕王は直ちに辯舌の士を秦にさしむけ、秦王に次のように説かせる、⁽¹⁴⁾「燕趙が齊の宋への攻撃に参加して齊を太らせようとしているのは、燕趙が秦を信用していないからである。秦が燕趙を味方にしたいなら、先に秦から兩國へ質子を出すべきである。かくて三國が同盟すれば、秦燕趙はそれぞれ西帝・北帝・中帝として天下に鼎立し、號令できるだろう。もし韓魏がこれに従わなければ秦がこれを伐ち、齊が従わなければ燕趙がこれを伐つ。その上で餘力を驅つて韓魏に齊を攻撃させ、齊の奪つた宋の地や楚の淮北の地を返還させる。そうすれば秦燕趙は、帝を稱する名譽も實質的利益も共々満足させられるだろう。逆にもし秦が燕趙を味方にしなければ、齊はそのまま覇者に推戴されてしまう。そうなれば天下の諸侯はみな齊の號令に従い、秦もそれに従わなければ齊の同盟諸侯に伐たれるだろう」と。このように説けば、秦王は必ずこの策を採用して齊を伐つはずで、これが燕にとって最上の外交で正當な利益でもあるのだ。

見られるように、この書簡の中核をなすのは二つの波線部分である。波線(a)において進言者は、燕王に對して燕の主導で趙と共に齊王を覇者に推戴し、その場で秦符を焚いて新たな盟約を取り交わすべきことを提言し、このような燕趙齊の同盟をちづかせて秦を動搖させると同時に、波線部分(b)において、秦に對してその打開策として秦から燕趙への質子の派遣や三國の稱帝による秦燕趙の同盟を提言させ、事態がどちらに展開しても燕に有利に働くように巧妙な策を授けている。するとこの兩部分から書簡の發せられた年代は自ずから限定されてくるはずなのであるが、これまで年代については(1)前二八八年後半説(馬雍)、(2)前二八六年説(燕策の鮑本注・林春溥・黃式三・顧觀光)、(3)前二八五年説(于鬯)、(4)前二八四年説(『史記會注考證』)等の諸説がある。⁽¹⁴⁾ただし唐蘭氏はこれを戰國末の縱橫家が蘇秦の口調をまねて作つたとする模作説を唱え、繆文遠氏もこれに同調されているが、⁽¹⁵⁾如上の検討からそれは受け入れがたいとすべきであらう。

この書簡の年代は稱帝がそのポイントになると思われる。六國年表・秦本紀の昭襄王一九年の條には、前二八八年に齊が東帝、秦が西帝を稱したことが記され、その詳細は齊策四の蘇秦自燕之齊・蘇秦謂齊王曰と田敬仲完世家湣王三十六年の條に見え、その内容はほぼ次の如くである（括弧内の字は田敬仲完世家によるもの）。

齊の湣王三十六年に燕から蘇代（秦）が來朝したとき、齊王は秦が帝號を贈つてきたことを彼に告げ、それにどう對處すべきかを問う。そこで彼は第一に、秦の稱帝に天下が從えば齊も稱帝し、秦の稱帝を天下が拒否したら齊も稱帝しない、という選擇基準を提示する。第二に、秦齊が共に稱帝し、盟約して趙または宋を伐つ場合には、宋を伐つのが有利と説く。ただそのさい、秦との盟約に背き、帝號を捨てて天下の人心を收攬し、その上で宋を伐つてこれを領有すれば如何なる波及効果があるかを逐一列擧し、そうなればその勢いに壓された燕・楚も服従し、齊に從わないものはなくなる、と結ぶ。『史記』ではその最後に「是に於いて、齊、帝を去て復た王と爲る。秦も亦た帝位を去つ」の一三字が挿入されている。この戰國故事は齊策四と田敬仲完世家の間で進言者の名を異にし（前者は蘇代、後者は蘇秦）、またその文は齊王と進言者の問答形式となっているので、後世の潤色を受けていると見なされるが、秦齊が稱帝した前二八八年前後における六國の關連記事は『史記』によって列記すると、表三のようになる。⁽¹⁶⁾この表で趙世家は秦の稱帝を前二八九年に編年しているが、藤田氏はこれを秦曆と趙曆の違いによるズレとされる。⁽¹⁷⁾これに連動してか趙の伐宋の記事も一年繰り上げて編年されているので、稱帝に關する紀年はやはり趙世家の方に問題があると思われ、秦齊が稱帝した年はやはり前二八八年とすべきであろう。

また齊が帝號を去てた事情については帛書四章の自齊獻書於燕王曰にはじめてその史料が見え、「齊・勺（趙）、阿に遇し、王、之を憂う。臣、遇に與かる。秦を功（攻）め帝を去てんことを約す」とあり、文中に「臣秦」とあるのでこの書簡は蘇秦によるものと考えられる。これより齊と趙が阿の地で「遇」つたことを憂慮した燕王のため、蘇秦はこの遇に立ちあつたが、このときに兩國は秦を攻め帝號を去る約束をしたことが知られる。趙策四の齊欲攻宋秦令起賈や五國伐秦無

功罷於成阜、魏策二の五國伐秦無功而還などによると、齊楚・三晉の五國はこうして秦を攻めることになったが、何の成果もなく成阜に撤退した。そこで齊は宋を伐つことに専念することになったという。したがって、こうした状況を鑑みると、帛書二〇章の書簡は前二八八年に秦齊が稱帝しかつ帝號を去てた直後に發せられたものと思われる。

第三章 會盟と符

そこで改めて帛書二〇章の内容に戻ると、進言者は齊王を霸者に推戴し、秦符を焚くことを求めているが、フ符を焚くとは如何なる行爲を意味するのであろうか。帛書一七章の胃(謂)起賈曰にこれと似た表現として「天下、且つは齊を攻め、且つは屬縦して焚の約を傳うるを爲す」とある。これは齊が宋を滅ぼしたとき五國が齊を攻める約束をしたので、ある人が齊のために魏の御史起賈に進言したという一節の中に見えるもので、それは要するに、五國が秦と連合しながらその裏で秦符を焚いて合縦の盟約をしていることを暴露したものである。整理小組はこれに「符の約を焚くを傳えて以て斷交を表示すること」と注している。これより帛書二〇章の秦符を焚く行爲とは、秦との同盟關係を斷つ意志表示と見なされ、我々は戰國時代の合縦・連衡に關する史料の中に_フ符_フがしばしば現れていることに注目せざるを得ない。例えば、秦策三の范雎曰に「穰侯の使者たるや、王の重きを操り、諸侯を決裂し、符を天下に刮_カち、敵を征し國を伐ち、敢えて聽かざる莫し」とあり(『史記』卷七九范雎列傳もほぼ同文)、これは秦の昭襄王の親政以前、政權を壟斷した穰侯の專權ぶりを非難した范雎の言葉であるが、それによると穰侯は、諸侯の同盟を決裂させ、符を天下に刮_カち、敵國を征伐したという。これはまさに秦の連衡策そのものに他ならないが、ではそれと符はどのように關連するのであろうか。

この_フ刮_フの事例に關して注目されるのは、前漢の高祖劉邦が帝位に即いた翌年十二月以降に行った功臣封建である。『史記』卷八高祖本紀六年冬十二月條に「乃ち功を論じ、諸々の列侯の與に符を刮_カち封を行_ハう⁽¹⁸⁾」とあり、『漢書』卷一高帝紀下の同年の條に「甲申、始めて符を刮_カち功臣の曹參等を封じて通侯と爲す」とあり、史漢の間でやや表現を

異にするが、これより功臣封建のさいに符を刮かったことが知られる。このときの刮符に關してさらに同書高帝紀下の贊に「又た功臣の與に符を刮かちて誓を作し、鐵契に丹書し、金匱石室もて之を宗廟に藏す」とあり、これによると功臣封建には刮符して誓いをなし、その誓詞を鐵契に丹書し、それを金匱石室に封緘し宗廟に收藏した、という。その誓の内容は『史記』卷一八高祖功臣侯者年表の序に、「封爵之誓に曰く、『河をして帶の如く、泰山をして厲の如くならしむとも、國以て永く寧く、爰に苗裔に及ばん』と」とあり、『漢書』卷一六高惠高后文功臣表の序に、「封爵之誓に曰く、『黃河⁽¹⁹⁾をして帶の如く、泰山をして厲の如くならしむとも、國以て永く存し、爰に苗裔に及ばん』と。是に於いて、申ぬるに丹書の信を以てし、重ぬるに白馬の盟を以てし、又た十八侯の位次を作る」とあるように、黃河が帶のように泰山が砥石のようにならぬ限り、その封國は永く安らかなまま子孫に傳襲されるだろう、と高祖によって宣誓されている。ただしこの誓詞は、『御覽』に引かれた『楚漢春秋』の文に、

『楚漢春秋』曰、高帝初侯者皆書券曰、「使黃河如帶泰山如礪、漢有宗廟、無絕世也」(卷五九八)。

『楚漢春秋』曰、高帝初封侯者皆賜丹書鐵券曰、「使黃河如帶泰山如礪、漢有宗廟、爾無絕世」(卷六三三)。

とあり、その後半部分(傍線)が異なっているので、清の沈欽韓は陸賈の『楚漢春秋』の方が原文に近く、文・景帝以後その大半が佚亡したので、掌籍者がその語を改めた結果と解している(『漢書疏證』卷三)。また梁玉繩は『困學紀聞』卷一二に

『楚漢春秋』云、高祖封侯賜丹書鐵券曰、「使黃河如帶泰山如礪、漢有宗廟、爾無絕世」。

と引かれてあるのに據り、陸賈は高祖のとき親しくこれを見ているので、きっと眞實を知っており、史漢に記載されたものは呂后が改めたものと推測している(『史記志疑』卷一一)。誓詞の本來の形についてはまだ検討の餘地はあるが、仁井田陞氏はこの封爵之誓と白馬之盟をヨーロッパ中世の Commendatio (托身式) や日本の起請と比較され、「家士が主君に對してなせる忠誠宣誓ではなくして、逆に、君主が臣下に對してなせる宣誓である」點においてこの史料のもつ意味に注目

された。⁽²⁰⁾これを承けて栗原朋信氏も、封爵之誓の「誓」は『尚書』の甘誓・湯誓・牧誓等における「誓」と相通じ、それは「命」の性質をもち、上位者から與えられる宣言・命令であり、對等者間で結ばれる雙務契約としての約信ではないことを論證されている。⁽²¹⁾ただし兩氏とも封爵之誓・白馬之盟に關するこれらの史料を引きながら、何故か符については言及がない。また諸家の注でも刮符と鐵券の關係を示す明文がない。そのため前引の『漢書』高帝紀の贊を改めて檢證してみると、この文は(1)功臣の與に符を刮かちて誓を作し、(2)鐵契に丹書し、(3)金匱石室もて之を宗廟に藏す、の三つの要素から成る構文と見なされ、(1)で刮かたれた符と(2)の鐵契は同一物と考えられる。諸家が符と鐵契の關係についてとりたてて言及しなかったのも、暗黙の裡にそのように理解しているためと解される。したがってこの文は、功臣の封建には誓いをなし、その誓詞の内容を鐵契に丹書し、その一つを功臣に刮かちと共に、もう一つを金匱石室に封緘し宗廟に收藏した、ということになる。仁井田氏が「鐵券は、一種の刮符であって、一半は功臣に頒賜し、一半は宗廟に保存し、事あるときはつき合わせの用に供したものであつて、證據文書の一つであつた」と述べておられるのも、これと同様に解しているからであらう。したがって、前引の秦策三で穰侯が「諸侯を決裂し、符を天下に刮かち、敵を征し國を伐つた」という刮符も、同じコンテキストにおいて解し得ると思われるのである。

さらに魏策二の五國伐秦無功而還に次のようにある。五國が合縱して秦を攻めたが、効果がなくて撤退すると、齊は宋を伐つことに専念し始めた。しかし秦がこれを邪魔するので、齊は秦と合縱して宋を伐つことにし、秦もこれに同意した。しかしこの齊秦兩國の連合を恐れた魏が秦と講和しようとする、ある人が魏王に進言してこれを阻止しようとした。この進言者は「臣はこれまで燕と敵對關係にある齊を連合させ婚姻關係にある秦を伐つために苦勞してきた」と述べているので、それは燕の立場に立つた進言であり、帛書二〇章の進言者と立場が共通する。また進言者は秦を伐つためそれまで自ら行ってきた外交成果の具體例として、「又た身自ら秦に醜^{にく}まれ、扮^{はな}(初^{はじめ})⁽²³⁾之に天下の秦符を焚かんと請える者は、臣なり。次に符を焚くの約を傳えし者は、臣なり。欲(鮑本改「次」)に五國を約して秦の關を閉じしめし者は、臣な

り」とも述べている。するとこの魏策二はちょうど帛書二〇章の内容の直後に位置するものと見なされるので、この兩篇の進言者は同一人物と思われる。さらに魏策二の方の文に進言者の指示で工作に従事している蘇脩の名が見え、前引の帛書四章の記事も含めて斟酌すれば、進言者は兄の蘇秦と見なされる。⁽²⁴⁾するとそのような蘇秦が狡いたという秦符は、穰侯が六國の同盟を分裂させ、天下に割かった符とは同じ物と見なされるのである。⁽²⁵⁾そして符が秦の連衡策において割かれたものとするれば、それは對等者間で交わされたとは考え難く、割符と共になされたはずの同盟の誓約も、前漢の封爵之誓から窺えるような、秦を主盟者として同盟國に與えた宣言・命令の性格をもつものであったと解されるのである。

一方、符はこのような連衡だけでなく、合縱においても用いられたらしい。すなわち『史記』卷四〇楚世家懷王一六年條に

張儀、秦に至り、詳つづり酔いて車より墜ち、病と稱し出でざること三月。地、得可からず。楚王曰く、「儀、吾の齊に絶つを以て尙お薄しと爲すか」と。乃ち勇士宋遺をして北して齊王を辱ずかしめしむ。齊王大いに怒り、楚の符を折りて秦に合す。

とあり、これは先にも觸れたが、齊楚の同盟を切り崩すため張儀によってなされた離間工作の一節である。これより兩國の同盟にも符が用いられた如くである。ただし同書卷七〇張儀列傳では傍線の部分を「乃ち勇士をして宋に至らしめ、宋の符を借り、北して齊王を罵らしむ。齊王、大いに怒り、節を折りて秦に下る。秦・齊の交わり合す」に作り、さらに秦策二の齊助楚攻秦では「乃ち勇士をして往きて齊王を罵らしむ」に作り、三者の間で文に異同が大きく、楚世家の『會注考證』引く清の張照『館本史記考證』は、本文は「乃ち勇士をして宋より書を遣り、北して齊王を辱ずかしめしむ」(原文：乃使勇士從宋遺書、北辱齊王)に作るべきで、從書しよの字が脱しているとする。しかし張儀列傳の文について梁玉繩が、齊を罵るに符を用いるのはなぜか、またなぜ楚が宋の符を借りなければならないのか、と問うているのは當然生じる疑問であるから(『史記志疑』卷一九)、三者の中では楚世家の文がもっとも正確に近いといえよう。これより齊楚の合縱でも符

が交わされ、張儀の離間策でそれが破綻すると、齊はその符を折るゝことで斷交の態度を示した、ということになる。

さて、連衡であれ合縱であれ、同盟にさいして符が交わされたとすれば、その誓盟と符の關係はどうなっているのだろうか。それを窺わせる内容は趙策二の蘇秦從燕之趙に見える。これは蘇秦が燕から趙に行き、始めて趙王に合縱の策を獻策したときの一節である（『史記』卷六九蘇秦列傳もほぼ同文であるが、異同が多い）。

天下の將相をして相與に洹水の上に會し、質を通じ白馬を刑して以て之を盟わしめ、約に曰く、「秦、楚を攻めば、齊魏は各々銳師を出して以て之を佐け、韓は食道を絶ち、趙は河漳を涉り、燕は常山の北を守らん。秦、韓魏を攻めば、則ち楚は其の後を絶ち、齊は銳師を出して以て之を佐け、趙は河漳を涉り、燕は雲中を守らん。秦、齊を攻めば、則ち楚は其の後を絶ち、韓は成車を守り、魏は午道を塞ぎ、趙は河漳・博闕を涉り、燕は銳師を出して以て之を佐けん。秦、燕を攻めば、則ち趙は常山を守り、楚は武闕に軍し、齊は渤海を涉り、韓魏は銳師を出して以て之を佐けん。秦、趙を攻めば、則ち韓は宜陽に軍し、楚は武闕に軍し、魏は河外に軍し、齊は渤海を涉り、燕は銳師を出して以て之を佐けん。諸侯、先に約に背く者有らば、五國共に之を伐たん」と。

これによると蘇秦は、六國の代表を洹水の邊に會同させ、質を交換し、白馬を刑して盟し、約に曰く以下の盟辭を取り交わすよう主張している。この記事も蘇秦と趙王の間答形式なので、後世の手が加わっていると思われるが、蘇秦列傳によれば、その後蘇秦は六國の合縱に成功すると、趙は「從約の書を秦に投じ」たという。秦に投じられた從約の書とは、約に曰く以下の誓盟の辭を書寫したものであろう。また齊策三の孟嘗君舍人にも、「齊・衛の先君、馬を刑して羊を壓して盟いて曰く、『齊・衛の後世、相攻伐する无からん。相攻伐する者有らば、其の命をして此の如くならしめん』と」という齊衛の會盟における誓盟文が見える。戰國時代の會盟で交わされた誓盟に關する史料は、春秋時代の載書と比べてあまりにも貧弱である。しかしこの時代でも盛んに會盟が行われた以上、趙策二から窺われるような誓盟が盟書として作成され、白馬（や羊）を刑して約の履行が盟われたと考えられる。ではそのような誓盟は何にどのように記され

たのであろうか。

第四章 符の形態をめぐって

春秋時代の盟書は、山西省侯馬市や河南省溫縣で出土した玉・石からその一端を窺えるが、⁽²⁷⁾戦國時代のものはまだ知られていない。そこで漢代の符について考えてみると、先に検討した封爵之誓の鐵契以外に銅虎符・竹使符が擧げられる。大庭脩氏はこのうち竹使符の形態を鄂君啓節のイメージに求めておられる。⁽²⁸⁾周知のように、この青銅器は楚の懷王六年に楚王が鄂君啓に與えた所謂關所の通行手形であり、出土したのは舟節一枚と車節三枚であるが、その本來の形は中央に節のある竹を縦に五等分したものと推定されている。その表面には、舟節が九行、每行一八字、計一六五字、車節が九行、每行一六字、計一五〇字の銘文が黄金で象嵌され、この節が通行する水陸交通路の範圍、交通期間、徵稅免除の特權等を記している。⁽²⁹⁾これが符ではなく、金節（原文）であるのは、交通に關わるものだからであらうか。

ところで、この鄂君啓節は意外にも先述の鐵契と似ているらしいのである。すなわち仁井田氏はこの鐵契文を唐宋に及ぶまで丹念に蒐集されているが、⁽³⁰⁾その中の唐の昭宗乾寧四年（八九七）八月錢武肅王鐵券については、『兩浙金石志』卷三に「形は篋瓦の如く、長さ一尺八寸三分、濶一尺一寸、厚さ一部五釐、重さ一百三十二兩、正書二十七行、三百三十三字、鐵を鎔て刻字を成し、外狹く中寬く黄金もて之を鑲む。⁽³¹⁾（後略）」とあり、その形は篋瓦で、字は黄金で象嵌されているという。さらに南宋の程大昌撰『演繁露』卷六鐵券の條によると、鐵券は鐵質金字、形は正圓、その内側を空にし、外側に鐵券文を刻し、古の傳別の如くその器を中分して一は官に藏し一は功臣に頒ち、鐵券が半篋の形を呈しているのはそのためである、と見える。⁽³²⁾篋瓦は筒瓦、篋は筒型の蒸し器である。これらより鐵券は鐵製の筒を縦に兩分した形で、その表面に刻された銘文には金の象嵌が施されていたことが知られる。さらに錢武肅王鐵券文には「申以誓詞、長河有似帶之期、泰山有如拳之日……」という辭が見え、同様の表現は仁井田氏の蒐集された鐵券文に全て見えるので、これより時代

こそ離れているが、それらの誓詞や形態は前漢以來の傳統を繼承したものと考えられる。この推定に大過なければ、前漢高祖の鐵契も鐵簡を縦に二分し、各々の表面に誓詞が金象嵌されたものと想定され、それは鄂君啓節に酷似したものといえる。すると前漢高祖が割かった符^{（34）}鐵契は、彼自身その文化圏に屬するところの楚の領域内で通行していた鄂君啓節のような金節に淵源する可能性を考えてみる必要が出てくる。

しかし漢制は多く秦制を承けているので、秦制を承けた可能性も考えてみる必要がある。そこで注目されるのが、一九四八年西安市西南の鄠縣で出土し、後に陳直氏によって取り上げられた所謂「戰國秦封宗邑瓦書」である。^{（33）}郭子直氏の報告によると、それは陶製で、長さ二四糎、幅六・五糎、厚さ一〇・五糎、側面から見ると中間がやや膨らみ天地が薄い。正背兩面に「秦式の篆」による刻字があり、字には朱が施され、全體の色は小豆色がかった灰色であるという。^{（35）}また郭氏の釋文によると、正面は六行九四字（重文記號は二字に數えた）、背面は三行（一行と二行の間に三行分の空隙あり）二七字あり、氏の解釋によるとこの瓦書は秦國政府が右庶長歟に宗邑を策封したさいの正式文書であり、官吏を指名派遣してこれをその宗邑に送り、一定の儀式をへて境界の地下に埋めたもので、後世の土地證書に似たものとする。しかし正面の冒頭に「四季、周の天子、卿夫＝（＝大夫）辰をして來たりて文武の酢（胙）を致さしむ」とあり、それは秦本紀惠文君四年の條に「天子、文武の胙を致す」とある記事を裏附けるものとされるが、それが宗邑の策封とどのように關連するのかわかりやすくもならず、その資料的性格をめぐる議論は始まったばかりである。この瓦書が戰國秦の封建制を検討する上で重要な一次史料であることは疑いないけれども、それは封君に割かたれた符^{（34）}なのか、また後の封爵之誓等と系譜的にどのように繋がってゆくのか、これらの問題は稿を改めて検討してみなければならぬ。

そこで再び帛書に戻ってみると、帛書二一章の獻書趙王に「且つ五國の主、嘗て合横して趙を伐ち、趙の壤^{（36）}を疎分せんことを謀り、之を盤孟に著し、之を祝籍に屬^{（37）}る」とある。これはある人が趙王に趙が秦と共に齊を伐つことの非を進言した書簡で、帛書二〇章よりやや後の内容である。趙策一の趙收天下且以伐齊ではこれを「昔者（鮑本に無し）、五國の王、

嘗て合横して趙を伐ち、趙國の壤地を參分せんことを謀り、之を盤孟に著し、之を讎柞に屬る」に作り、趙世家の惠文王一六年條の同文ではこの部分がない。この文に對して清の孫詒讓は『札遶』卷三戰國策高誘注において、

疑うらくは、讎柞は當に讀みて疇籍と爲すならん。讎・疇・柞・籍は、並びに聲近く假借の字なり。讎は讎の聲に从い、『説文』讎部に云う「讎は、讀みて醢の若し」と。籍は、古音 柞に同じかりしは、前に詳らかなり。(36) (中略)

『淮南子』汜論訓「履天子之籍」の高注に「籍、或いは柞に作る」と云い、柞・柞・柞の聲は類同たり。古の典冊篇章、或いは之を疇と謂う。(中略)「之を盤孟に著し、之を讎柞に屬る」とは、謂うところ五國の約誓の言、之を彝器と冊籍に書すなり。

と注解しているが、柞・籍を假借とする解はこの帛書で裏附けられることになったので、讎・疇と祝も音の近い假借なのである。これより五國で趙を伐つ約の内容は彝器と冊籍に記されたことになる。(37) するとここで想起されるのは、『周禮』秋官の司約の條に「凡そ大約劑は宗彝に書し、小約劑は丹圖に書す」とある文で、鄭玄の注によると邦國間の約は宗廟の六彝に刻まれ、民間の約は丹圖に書せられるという。ただし丹圖については諸説あり、鄭注では「或いは有た彫器簠簋の屬にして、圖象有る者か」と問い、孫詒讓『周禮正義』卷六八に引く清の惠士奇は、『韓非子』大體篇に「(安泰な世とは)豪傑、名を圖書に著さず、功を盤孟に錄せず、記年の牒空虚な(る状態である)」とあるのに據り、「盤孟は宗彝の屬、圖書は即ち丹圖なり」と解し、孫詒讓もこれをふまえて「小約劑は、事輕く文約なれば、則ち竹帛に書し、取りて検討するに足るのみ。必ずしも之を金石に鏤まざるなり」と解している。このように『周禮』では約が記錄される器物を宗彝と丹圖に分け、惠士奇は『韓非子』に據ってこれを盤孟と圖書に解し、孫詒讓は後者を竹帛に解している。すると孫詒讓の解を通して得られた帛書二一章における五國伐趙の約が、盤孟と冊籍に記されたというのも、この『周禮』の文と通底しているように思われる。すなわち盟辭の正本にあたるものは、前漢の封爵之誓の場合のように彝器に刻されて宗廟に收藏され、いわば副本として冊籍にもその盟辭が書寫されたものではあるまいか。しかしその彝器は符として分割し得るも

のでなければならぬので、盤盂のような特定の器型をもつものよりも（無論それもあり得るが）、むしろ鄂君啓節のような竹節を象ったものか、それを抽象化した筒状のものと想定する方がよいように思われる。したがって諸史料に「之を盤盂に著し」「符を焚く（折る）」とあるのは、修辭上の表現と解されるのである。

むすび

史料的に限界があるため推測を重ねすぎた嫌いはあるが、在來文獻と馬王堆漢墓帛書を主とする出土文字資料を組み合わせて、戰國時代の會盟の問題を検討してきたが、以上によりこの時代の政治現象の特徴とされた合縱連衡は、まさに會盟を通じて展開されていたことがほほ明らかとなったと思われる。換言すれば、會盟は戰國時代になって姿を消したのではなく、中央に統一政權が存在せず、政局が秦と六國の對立に收斂されてゆく中で、合縱連衡の中に組み込まれて機能していたのである。その儀禮には白馬等の供犠を伴っていたが、前代におけるような宗教性は希薄となり、符が交わされたところにこの時代の特徴があった。この符はまさに仁井田氏の所謂「證據文書」の性格をもち、したがって内容も具體的で現實的な取り決めがなされた。しかしその反面、六國年表の序で「謀詐用いられて從衡短長の説起り、矯稱 讒のごとく出で、誓盟 信ならず。質を置き符を剖くと雖も、猶お約束すること能わず」と記されているような状況もまた現實で、誓盟はたえず破られ、破られるたびに新たな誓盟がなされた。結局、會盟が對異民族との交渉の場合を除いてその役割を終えるのは、戰國の分裂が收拾され、秦漢の統一帝國が成立することによってであった。

註

(1) 本田濟「かいめい 會盟」『アジア歴史事典』2、平凡

社、一九五九年。會盟に關する同氏の專論は「春秋會盟考」

『日本中國學會報』一集、一九五〇年、同氏著『東洋思想

史研究』所收、創文社、一九八七年、再録。

(2) 陳願遠『中國國際法遡源』（商務印書館、臺北、一九六七

年）。

- (3) 關勸吾『春秋』一書中反映與生產有關的「三事」(『中國歷史文獻研究所集刊』第一集、一九八〇年)。
- (4) 高木智見「春秋時代の結盟習俗について」(『史林』六七卷六號、一九八五年)。
- (5) 飲血の具體的方法については、「飲血」と「塗血」の二つの解釋に分かれている。前者は鎌田重雄氏の「中國古代の同盟」(同氏著『史論史話第二』所收、新生社、一九六七年)に代表され、後者は竹添光鴻『左氏會箋』隱公元年條に代表される。
- (6) 楊寬『戰國史』(上海人民出版社、一九八〇年、第二版、三一七・八頁)。
- (7) 『史記』卷四五韓世家では、これを「甘茂與昭魚遇於商於」に作る。
- (8) 『史記』卷七六平原君列傳では、秦に對抗するため趙と楚が合縱したときの盟を述べた中で、犠牲として「雞狗馬」が見えている。
- (9) 帛書の概要については、工藤元男「馬王堆出土『戰國縱橫家書』と『史記』」(早稻田大學東洋史研究室編『中國正史の基礎的研究』所收、早稻田大學出版部、一九八四年)、藤田勝久「馬王堆帛書『戰國縱橫家書』について」(佐藤武敏監修、工藤元男・早苗良雄・藤田勝久譯注『馬王堆帛書 戰國縱橫家書』所收、朋友書店、一九九三年)を参照された。
- (10) 同章の譯注については、前掲書『馬王堆帛書 戰國縱橫家書』二四八～二六三頁参照。
- (11) これらの前後の挿入句は、前漢末に劉向によって校訂される以前の(原)『戰國策』で行われていたものを『史記』が襲用したものか、あるいは『史記』で行われた挿入を劉向がそのまま採用したものかは、定かでない。
- (12) 藤田勝久「馬王堆帛書『戰國縱橫家書』の構成と性格」(『愛媛大學教養部紀要』第一九號、一九八六)。
- (13) 以上の概説は、劉澤華他『中國古代史(上)』第三章第七節(人民出版社、北京、一九七九年)、楊寬『戰國史』第八章(上海人民出版社、一九八〇年、第二版)を参照。
- (14) 詳細は前掲書『馬王堆帛書 戰國縱橫家書』二五二・三頁参照。
- (15) 唐蘭「司馬遷所沒有見過的珍貴史料」(馬王堆漢墓帛書整理小組編『戰國縱橫家書』所收、文物出版社、北京、一九八六年)、繆文遠氏「戰國策考辨」(中華書局、北京、一九八四年、三〇二頁)。
- (16) 藤田勝久『史記』趙世家の史料性格」(『愛媛大學教養部紀要』第二二號、一九八九年)。
- (17) 最近平勢隆郎氏は、君主の稱元法が戰國中期に王號の稱と共に立年稱元から踰年稱元に轉換されたとして、戰國紀年の新たな編年を試みられているが、最新作の「戰國紀年再構成に關する試論―續―」(『東洋文化研究所紀要』第二三冊、一九九四年)によると、この年の齊の紀年を「宣湣王三二年」(前二八八)とされている。
- (18) この記事の直前に、高祖の從父弟劉賈・弟劉交・子劉肥を各々荊王・楚王・齊王に封じたことが記されているが、『史

『記』卷一七漢興以來諸侯王年表や『漢書』卷一四諸侯王表によると、彼らは高祖六年正月に封じられているので、梁玉繩は「乃論功、與諸列侯剖符行封」の文をその後に置くのは非なり、とする（『史記志疑』卷六）。

(19) 王念孫は、誓文中の「黃河」の「黃」字は後人の加えた衍字とする（『讀書雜誌』三、漢書第二）。

(20) 仁井田陞『唐宋法律文書の研究』第三編第二章鐵券（東京大學出版會、一九三七年初版、一九八三年復刻）。

(21) 栗原朋信『「封爵之誓」について的小研究』（同氏著『秦漢史の研究』所收、吉川弘文館、一九六〇年）。

(22) 仁井田陞前掲書『唐宋法律文書の研究』八〇八頁。

(23) 黃丕烈『札記』卷下（重刻刻川姚氏本戰國策附）は、「扮當作初、形近之譌」とし、今これに従う。

(24) 楊寬氏は趙策四の齊欲攻宋、齊將攻宋、五國伐秦無功、魏策二の五國伐秦無功而還は、みな蘇秦に關する同じ原始資料であり、そのためそれらの内容が一致し相互に關連しているのだ、と述べておられる（『馬王堆帛書《戰國縱橫家書》的史料價值』前掲『戰國縱橫家書』所收）。したがって、今後帛書二〇章をそのような視座から讀み直し、この時期の正確な歴史像を復元してゆく必要がある。

(25) ここで言う「同じ物」とは「同じ次元の物」という意味で、魏侯と蘇秦が同時代の人物であるか否かについては、今後も検討を重ねてゆきたい。

(26) 王念孫『讀書雜誌』第一冊戰國策第二齊涉渤海の條は、渤海を清河の誤りとする。

(27) 山西省文物工作委員會編『侯馬盟書』（文物出版社、北京、一九七六年）、河南省文物研究所『河南溫縣東周盟誓遺址一號坎發掘簡報』（『文物』一九八三年第三期）。

(28) 大庭脩「居延出土の詔書斷簡」（同氏著『秦漢法制史の研究』所收、創文社、一九八二年）。

(29) この青銅器に關する最近の研究動向については、藤田勝久「戰國楚の領域形成と交通路——『史記』楚世家と鄒君啓節の比較検討——」（平成五年度科學研究報告書『史記』『漢書』の再検討と古代社會の地域的研究）所收、一九九四年）を参照。

(30) 仁井田陞前掲書、八〇七—八一九頁。

(31) 仁井田陞前掲書、八一—一頁の要約による。

(32) 『金石萃編』卷一一八、唐七十八賜錢鑄鐵券の錄文では「似」を「侶」に作る。

(33) 陳直『史記新證』（天津人民出版社、一九七八年、一四頁）。

(34) 郭子直「戰國秦宗邑瓦書銘文新釋」（『古文字研究』第四輯、一九八六年）。

(35) 萩山明「出土文字資料—木簡・骨策・瓦書—」（『古史春秋』第六號、一九八九年）。

(36) 同書卷三齊四の條にその解が見える。

(37) 先に『馬王堆帛書 戰國縱橫家書』で行った解釋を小論では變えている。

〔附記〕小論は、一九九二年一月二五日、第九〇回史學會大會・東洋史部會で報告した「戰國の會盟——主として馬王堆帛書『戰國縱橫家書』による——」を骨子とするものである。

表 一

B. C.	會盟國及會盟者	種 別	場 所	『史 記』 篇 名
407	齊宣公／鄭人	會	西城	六國年表／田敬仲完世家
402	齊田太公／魏文侯	會	濁澤	田敬仲完世家
389	齊康公／晉／衛	會	濁澤	六國年表
366	魏惠王／韓懿侯	會	宅陽	六國年表／魏世家／韓世家
362	趙成侯／韓昭侯	遇	上黨	趙世家
358	趙成侯／魏惠王	遇	葛孽	趙世家
357	魏惠王／趙	會	鄆	六國年表／魏世家
356	魏惠王／魯衛宋鄭君	朝	大梁？	六國年表／魏世家 ⁽¹⁾
	趙成侯／齊威王／宋	會	平陸	六國年表／趙世家／田敬仲完世家
	趙成侯／燕	會	阿	六國年表／趙世家
355	秦孝公／魏惠王	會	杜平	秦本紀／六國年表／魏世家
	齊威王／魏王	會	？	六國年表／田敬仲完世家
351	魏惠王／趙成侯	盟	漳水上	六國年表／趙世家／魏世家
350	魏惠王／秦	遇 ⁽²⁾	彤	趙世家
348	趙肅侯／魏惠王	遇	陰晉	魏世家
346	趙肅侯／周顯王	朝	周廷？	趙世家
344	周顯王／秦／諸侯	會	周廷？	周本紀／六國年表
342	秦公子少官／諸侯	會	逢澤	秦本紀／六國年表
340	齊宣王／趙	會	博望？	六國年表
340？	齊宣王／三晉之王	朝／盟	博望	田敬仲完世家
337	秦惠文君／楚韓趙蜀人	朝	咸陽	秦本紀／六國年表
336	齊宣王／魏惠王	會	平阿南	六國年表／魏世家／田敬仲完世家
335	齊宣王／魏惠王	會	甄	六國年表／魏世家／田敬仲完世家
334	齊宣王／魏襄王	會	徐州	六國年表／魏世家／田敬仲完世家
329	秦惠文君／魏襄王	會	應	秦本紀／六國年表／魏世家
326	秦惠文君／？	會	龍門	六國年表
325	趙武靈王／韓宣王・ 太子倉	朝	信宮	趙世家
323	秦相張儀／楚齊魏相	會／盟	緡桑	秦本紀／六國年表／楚世家／魏世家／田敬仲完世家
322	秦惠文王／韓・魏太子 趙武靈王／韓宣惠王	朝 會	咸陽 區鼠	秦本紀 六國年表／趙世家／韓世家
313	秦惠文王／魏哀王	會	臨晉	秦本紀／六國年表／魏世家
310	秦武王／魏惠王	會	臨晉	秦本紀／六國年表／魏世家

B. C.	會盟國及會盟者	種別	場所	『史記』篇名
308	秦武王／韓襄王	會	臨晉(城外)	秦本紀／六國年表／韓世家
	秦武王／魏哀王	會	應	六國年表／魏世家
307	秦武王／魏太子	朝	咸陽	秦本紀／六國年表／魏世家
304	秦昭襄王／楚懷王	會	黃棘	秦本紀／六國年表
302	秦昭襄王／魏哀王	朝	應亭	秦本紀／六國年表
	秦昭襄王／魏哀王	會	臨晉	六國年表／魏世家
	秦昭襄王／韓太子嬰	會／朝	臨晉／咸陽	六國年表／韓世家
299	秦昭襄王／楚懷王	會／朝	武關／咸陽	秦本紀／六國年表／楚世家 ⁽³⁾
	魏哀王／齊王	會	韓	六國年表／韓世家
290	秦昭襄王／韓城陽君	朝	咸陽	秦本紀
	秦昭襄王／東周君・韓城陽君	朝	咸陽	秦本紀
285	秦昭襄王／楚頃襄王	會	宛	秦本紀／六國年表／楚世家
	秦昭襄王／趙惠文王	會	中陽	秦本紀／六國年表／趙世家
284	秦昭襄王／魏昭王	會	宜陽	秦本紀／六國年表？
	秦昭襄王／韓釐王	會	新城	六國年表？／秦本紀
	秦昭襄王／魏昭王	會	西周	六國年表？／魏世家
	秦昭襄王／韓釐王	會	西周	六國年表？／韓世家
283	秦昭襄王／楚頃襄王	會	鄢／穰	秦本紀／六國年表／楚世家
	趙惠文王／燕王	遇	？	趙世家
282	趙惠文王／秦昭襄王	遇 ⁽⁴⁾	西河外	趙世家
	趙惠文王／秦	會	龍池	六國年表
278	秦昭襄王／周君	來	咸陽	秦本紀
	秦昭襄王／楚王	會	襄陵	秦本紀
254	秦昭襄王／韓王	朝	咸陽	秦本紀
242	趙相／魏相	會盟	(魯)柯	六國年表
237	秦王政／齊王建	朝	咸陽	六國年表／田敬仲完世家

註

- (1) 六國年表の『集解』引の徐廣の注に「紀年一曰『魯共侯來朝。邯鄲成侯會燕成侯平安邑。』。」とあり、魏世家の『索隱』に「按、紀年魯恭侯・宋桓侯・衛成侯・鄭釐侯來朝、皆在十四年、是也。鄭釐侯者、韓昭侯也。韓哀侯滅鄭而徙都之、改號曰鄭」とある。
- (2) 魏世家惠王二十一年では「會」に作る。
- (3) 同文は秦本紀では昭襄王十年、楚世家では三十年の條に見えるが、六國年表では秦昭襄王八年の條に見えるので、とりあえず秦昭襄王八年に繫年した。
- (4) 藺相如列傳に「臣嘗從大王與燕王會境上」とある。

表二 書簡・奏言形式の文における「今」の回数

章	書簡奏言形式の文の冒頭	今の回数
一	自趙獻書燕王曰	三 回
二	使韓山獻書燕王曰	一 回
三	使盛慶獻書於【燕王曰】	三 回
四	自齊獻書於燕王曰	三 回
六	自粲（梁）獻書於燕王曰	二 回
七	自粲（梁）獻書於燕王曰	二 回
一一	自趙獻書於齊王曰	零 回
一二	自勻（趙）獻書於齊王曰	四 回
一三	乾（韓）賁獻書於齊曰：	一 回
二〇	胃（謂）燕王曰：	五 回
二一	獻書趙王：	五 回

表三 前三世紀初めにおける秦齊稱帝関係史料（「本紀／世家」は秦本紀以外はみな各家による）

B. C.	六 國 年 表	本 紀 / 世 家
289		〔趙〕 秦自置爲西帝。
288	〔秦〕 十月爲帝，十二月復爲王。	〔秦〕 王爲西帝，齊爲東帝，皆復去之。……齊破宋，宋王在魏，死溫。 〔魏〕 秦昭王爲西帝，齊湣王爲東帝，月餘皆復稱王歸帝。 〔趙〕 董叔與魏氏伐宋，得河陽於魏秦取梗陽。 〔楚〕 齊秦各自稱爲帝，月餘復歸帝爲王。 〔齊〕 爲東帝，二月復爲王。 〔齊〕 王爲東帝，秦昭王爲西帝。（前引の蘇代の故事）。
286		〔魏〕 齊滅宋，宋王死我溫。 〔齊〕 ……於是齊遂伐宋，宋王出亡，死於溫。齊南割楚之淮北，西侵三晉，欲以并周室，爲天子。
285	〔秦〕 蒙武擊齊。	〔秦〕 蒙武伐齊。 〔齊〕 秦來伐拔列城九。
284	〔秦〕 尉斯離與韓魏燕趙共擊齊，破之。 〔魏〕 與秦擊齊濟西。 〔韓〕 與秦擊齊濟西。 〔楚〕 取齊淮北。 〔燕〕 與秦三晉擊齊。 〔齊〕 五國共擊湣王，王走莒。	〔秦〕 尉斯離與三晉燕伐擊齊，破之濟西。 〔魏〕 與秦趙韓燕共伐齊，敗之濟西，湣王出亡。 〔韓〕 與秦昭王會西周而佐秦攻齊。齊破，湣王出亡。 〔楚〕 楚王與秦三晉燕共伐齊，取淮北。 〔燕〕 ……與秦楚三晉合謀以伐齊。齊兵敗，湣王出亡於外。 〔齊〕 燕秦楚三晉合謀，各出銳師以伐，敗我濟西。……湣王出亡，之衛。

HUIMENG 會盟 AND FU 符 DURING THE WARRING
STATES PERIOD 戰國時代—Chapter 20 of the
Mawangdui Han Tomb Silk Manuscript 馬王堆漢墓
帛書 *Zhanguo Zonghengjia Shu* 戰國縱橫家書—

KUDO Motoo

Analysis based on recently excavated texts, the main of which is the Mawangdui Han tomb silk manuscript, shows that the Hezong-Lianheng 合縱連衡 system, which has been regarded as the representative political system of the Warring states period, evolved through the use of Huimeng 會盟 and Fu 符. In other words, Huimeng did not disappear with the onset of the Warring States period, as is generally believed. In fact, there was in this period no central unified government and as the political situation deteriorated into a confrontation between the Qin 秦 and the Liu-guo 六國, Huimeng retained its function via its incorporation into the Hezong-Lianheng system.

The presentation of white horses as part of the Huimeng ritual during the Warring States period was carried out, however, in an altered setting. The religious import of these gifts, prevalent during the preceding Spring and Autumn period 春秋時代 receded and was replaced with an emphasis on exchange. Fu as exchange became symbolic of the era. Because Fu were used as documentary evidences, they provide examples of specific and concrete agreements. Agreements forged between countries using these Huimeng were often broken, and each time this happened a new agreement had to be created. Ultimately, except for their retention for use in negotiations with foreign nations, Huimeng became obsolete with the formation of the Qin 秦 and Han 漢 unified empires.